

宮古語の継承

3年1組12番 北浦華純
3年1組33番 米澤愛
3年2組19番 筒井美帆

Keyword:「宮古語」「方言」「言語」「消滅の危機」「継承」

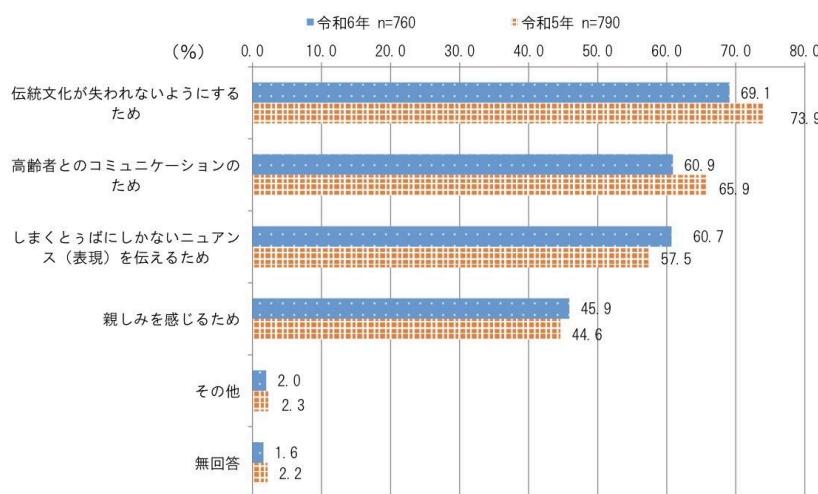
1. はじめに

私達が宮古語の継承について探究をしようと決めたきっかけは、テレビなどで方言についての特集番組を見たことだ。私達が話す方言と同じ国にある方言なのにも関わらず、聞き取れないものや、今でも形が変わり続いているものなどがあり、方言の多様さに、より興味を持つようになった。さらに方言について調べていく中で、日本では宮古語を含む8つの方言が消滅の危機にあるとされていると知った。

方言はその方言が話される地域にある文化と結びついており、方言を継承することによって文化を守りたいと考えた。また、方言の中で、宮古語を選択した理由は、イラストレーターのナガノ氏による漫画『ちいかわ』に登場する「シーサー」が宮古語を話していたからだ。方言を身近な物から興味を持ってもらい、継承を進めたいと考えていた私たちにとって、世界で人気がある作品を通して方言が取り上げられる事例を分析することは、どのように少数言語(方言)を継承するかを考える上でとても参考になると考えた。そこで、宮古語に焦点を絞り、まずは長い間行われている継承活動に目を向けた。

2. 序論

私達が宮古語の継承を探究する目的は、私達自身が関西弁を通して安心感や帰属意識を得ているように、宮古語も同じ役割を持っていると感じ、その価値を継承していくためである。また沖縄県民に対して行われた令和7年沖縄県しまくとうば県民意識調査報告書での「生活での必要性について、その理由を教えてください」という複数回答可の質問に対し、「しまくとうばにしかない表現を伝えるため」が約60%、「親しみを感じるため」が約45%おり、私たちにも通ずる安心感を、現地の人たちも感じ、継承されることを望んでいることが分かった。



(沖縄県公式ホームページ 沖縄県しまくとうば県民意識調査 報告書 令和7年3月 より資料を引用)

また、私たちが宮古語の継承について探究を進めていく中で、消滅の危機にあるハワイ語が継承されているという事例を知った。ハワイ語は1896年に公教育での使用禁止が制定され、それによって家庭や学校では英語が話されるようになった。さらに、フラダンスで使われる歌詞は、ハワイ語がわからなくなることでメッセージが薄れていった。その後、1978年にはハワイ州憲法改正が行われ、ハワイ語は英語とともに公用語として認定された。そこから、ハワイ語だけで教育を行う学校が誕生し、ハワイ語メディアが普及はじめた。日常的なハワイ語使用者は一万人未満と言われているが、復権の兆しは少しずつ見え始めているという(松原好次, 2006)。

そのような事例を踏まえて、宮古語を習得していない私達が宮古語を継承することは難しいと考えた。また、藤田ラウンド幸世によると、宮古語は地元でも使用が限られる言葉であり、流暢に話すことができるのは大体60歳以上で、20-30代になると聞き取ることも難しくなる。言語を習得するとなると個人で継続的に努力することや、それを支援する環境が不可欠だが、子供達に繋げるには、言語教育のように教えるだけでなく、動機や興味に働きかける意識を育てることが大切だという(藤田ラウンド幸世, 2015)。そのため、宮古語を継承することに繋がるよう、知名度を上げる活動をすることにした。

知名度を上げるために私達は、宮古語についてパンフレットにまとめ、パンフレットを図書室に設置してもらうことにした。パンフレットの設置にあたっては本校の司書の先生の協力のもと、私たちで選書をし、方言に関する本の特別展示コーナーを作成することにした。また、パンフレットについては学校内でも配布することにした。

パンフレットには、宮古語が消滅危機であることなどの説明を簡潔にまとめたもの、宮古語と沖縄語の違い、しまくとうばハンドブックに掲載されている簡単な日常で使える言葉を掲載した(下図:作成したパンフレットのデータを参照)。

パンフレットを配布するだけでは知名度が上がったかわからないため、読んでもらった方にはアンケートに答えてもらうようにした。図書室に作成した展示本コーナーには、本と共にパンフレットを設置した。また、宮古語がどのような方言であって、現在消滅危機であることを紹介するポスターも貼ることで興味を持ってもらい、パンフレットや本を見てもらえるように誘導する工夫もした。設置した本については、宮古語だけでなく今現在ある全国の方言についての本も一緒に選んだ。そうすることで宮古語以外の方言があることを知ってもらえるのではないかと考えた。



作成したパンフレット



図書室前に設置したパンフレットと方言に関する選書コーナー

3.本論

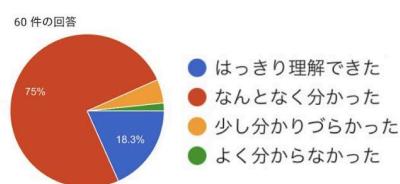
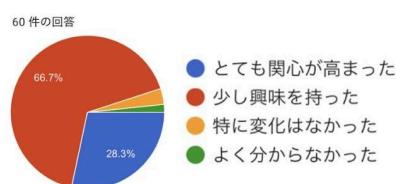
私たちはパンフレットによって、より多くの人に宮古語の魅力が伝わるかを知るために、アンケートを実施し、計60名に回答してもらった。以下の画像がアンケート結果である。アンケート内容としては、パンフレットの構成についてを4問、宮古語に対する認識の変化については6問用意した。ここでは、宮古語に対する興味・関心の変化についてとったアンケートの回答をまとめる。

Q1では、私たちが作成したパンフレットを見て、宮古語に対する興味・関心に変化があったかを質問した。結果として1番多かったのは、66.7%の「少し興味を持った」であった。2番目は、28.3%の「とても関心が高まった」であり、この結果から、大半の回答者に興味を持つもらうことができたと考える。

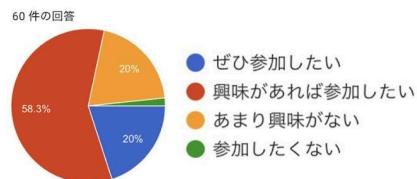
またQ2では、その理由について回答してもらった。回答としては、「標準語と異なることが多く、面白い」、「沖縄語(うちなーぐち)は知っていたが、違いがあることを知らなかった」などがあった。

次にQ3では、宮古語についてどのくらい理解することができたかを質問した。結果として1番多かったのは、75%の「なんとなくわかった」であった。2番目は、18.3%の「はっきり理解できた」であり、宮古語の存在を知つてもらう上で大切な、言語の情報などを理解してもらえたと考える。

Q1 このパンフレットを読んで、あなたの宮古語に対する、
興味・関心に変化はありましたか？



Q10 今後、宮古語やしまくとうばを学ぶ活動があつたら
参加したいですか？



4. 結論

結論として、私達は現代の日本において8つある消滅言語の中から宮古語に焦点を置き、継承活動を中心に探究活動を行った。宮古語について、現在の宮古語の消滅の進行状況、宮古語の認知度などを私達が知った上で、身近なところからでも認知度を上げられるように校内でパンフレットを配布した。さらにこのパンフレットを読んだ後、読む前後で宮古語に対する興味や関心の変化や、理解度、パンフレット内容の改善点などの多くの意見をもらうためにアンケートを行った。アンケート結果から、宮古語が消滅危機であること、継承活動が重要であることを再確認することができ、今後の活動に活用出来る意見を多く得る事ができた。

これから課題としては、パンフレットや宮古語に対するアンケート結果や意見を元に、見やすくしてより多くの方に宮古語の興味関心を持っていただけるような内容の深いパンフレットを制作し、校内だけでなく市役所などにパンフレットの配布場所を増やして、幅広い年齢層にも宮古語の存在を知ってもらえるような継承活動を続けたい。

5. おわりに

私たちが探究したテーマが、離れた沖縄にある宮古島で話されている「宮古語の継承」ということもあり、自分たちが認識している世界の狭さを知るきっかけになり、そこから視野を広げることで、言語の面白さを改めて感じた。また、言語・方言が単なるコミュニケーションの手段であるだけでなく、それぞれの人のアイデンティティでもあり、その土地の歴史や文化、人々の思いが受け継がれてきたものであることを再認識し、これからも言語とともに文化や人々を尊重していきたいと思った。さらに、言語の継承は、書物や動画などで記録を一方的に残すことではないことに気づいた。若い世代の人々が自ら興味を持ち、そこから地域や教育機関で学ぶという、一方的ではない関係が大切だということを知った。私たちは、過去に行われた標準語励行運動のような過ちを繰り返すことがないように、人々が地域の言語に誇りをもてるよう、呼びかけていきたいと思う。

6. 参考文献・出典

「消滅の危機にある言語・方言」『文化庁』.

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/index.html. (

n.d.) 2025年3月閲覧

「沖縄県しまくとぅば県民意識調査 報告書」『沖縄県』.

https://www.pref.okinawa.lg.jp/_res/projects/default_project_page/001/011/778/r6ishikityousa.pdf. 2025年3月 2025年5月閲覧

藤田ラウンド幸世(2015).「学校教育の中で言語継承への気づきを育てる－沖縄県宮古島市の自尊感情につなげる教育実践－」『国際基督教大学社会科学研究所紀要「社会科学ジャーナル』, 57号, p.175-182. https://icu.repo.nii.ac.jp/record/3513/files/18_ノート-藤田ラウンド.pdf 2025年9月閲覧

松原好次(2006).「ハワイ語再活性化運動の現況－ナーヴァヒー校卒業生に対する追跡調査報告」『電気通信大学紀要』, 19巻1・2合併号, p.117-128.

<https://uec.repo.nii.ac.jp/record/6956/files/9000000141.pdf> 2025年11月閲覧